



『グローバル教育コンクール2009』

“A-Style” ～足元を見つめなおし、自己理解につなげる国際協力活動～



「秋商」のユニフォームを着たマラウイの高校生たち

グローバル開発教育コンクール

秋田商業の実践報告

I 秋田市立秋田商業高等学校

<1> 概 況

本校は、1921 年創立の市立高校で、来年に創立 90 周年を迎える秋田県下の伝統校である。校訓に「感謝 勤勉 鍛錬」を掲げ、商業専門高校として生徒の自立する心や、想像力、主体性を育み、実社会での活躍できる実践力、専門性のある職業人を育てることを目標としている。また、学習への熱意を通し、地域社会の活性化のために貢献できるような人材の育成も目標としている。また、クラブ活動を通して人間性を育成するため、技術を高めることだけに終始せず、礼儀や挨拶をはじめ人間としての心の持ち方や姿勢を指導することにも重きを置いている。

<2> 学 習

商業専門高校としての責任を負う本校では、学校独自の工夫されたカリキュラムを持っている。生徒の進路を実現させるため、3 つのコースをしき生徒は自分の興味や必要性からいくつかの教科・科目を選択できるようになっている。さらに、本校では生徒に対し、様々な技術・仕事に必要な資格(国家資格を含む)を取得するための手助けを行っている。これらの資格を取得することで、生徒は就職や大学進学の際に活かすことができる。

学校独自のカリキュラムの中でも特筆すべきことは総合的な学習の時間を使つての取り組みである。本校では、学校を一つの企業体と見立て、2、3 年生を各部・課に分け、それぞれで調査・研究、開発・販売、宣伝などを実践する「ビジネス実践」¹を行っている。

¹ 実社会との関わりを重視し、職業意識やコミュニケーション能力、社会への適応能力や実践力を育成するとともに、地域との交流を通し地域社会への理解と貢献の意識を深めさせるための学校活動の一つ。総合的な学習の時間(1 単位)で各部・課に配属された生徒が、製品開発、制作、販売、地域貢献・イベント企画などの部門で活動を展開する。今年

2、3 年生は学年の枠を超え、全員が各課に配属され、社会に出たときの「実践力」を培うことを目標に、各部、各課の仕事を自分たちで考えながら実践している。また本校ではこの「ビジネス実践」をキャリア教育の一環を担うものとして位置づけている。「ビジネス実践」の発表の場である「AKISHOP (アキショップ)」²では、秋田市内の大型総合イベント施設を借り切って、1 日限りのお店を開店しており、毎年好評を博している。

II グローバル教育の取り組み(1)

“ A-Style ”³

～足元を見つめなおし、
自己理解につなげる国際協力活動～

<1> 実践につながる動機と経緯

高校生は目の前に進路選択が迫り、人生の大きな決断を迫られる時期のなかにある。実際に生徒と接してキャリアカウンセリングをしていても、自分に自信がない、自分の適性がわからない、将来のビジョンがもてないといった生徒が多いことに気づく。確かに、本校の生徒にとっては検定取得に向けた学習や遅くまでの部活動で、将来についてじっくり考える時間もなく、毎日を過ごすことが精一杯であるのが現状である。そのような中で自分を理解し、自分のすべき事、必要なことに気づくのは容易な事ではない。

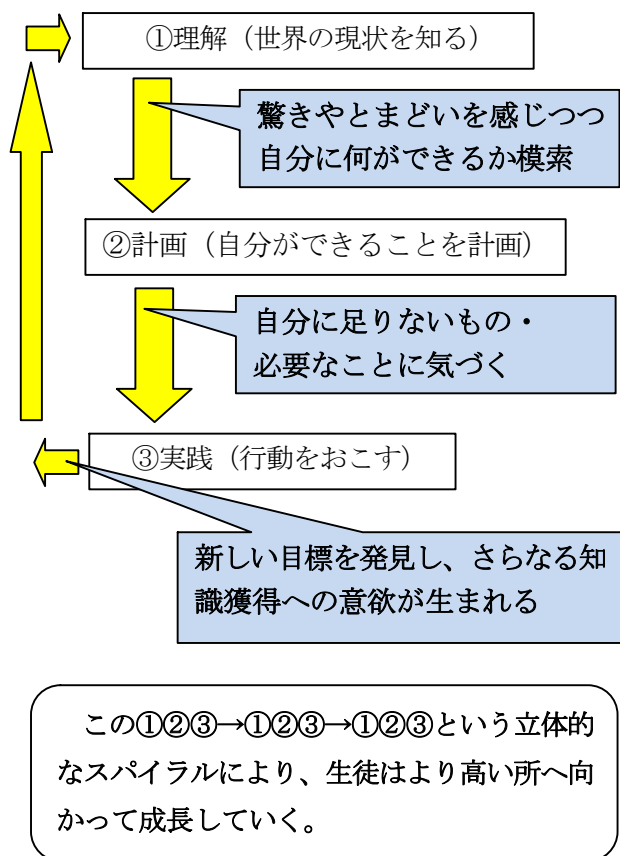
しかしながら、生徒が比較的興味を抱き、少なからず関わりたいと考えている「国際理解・国際協力活動」という媒体を通じて「自分を見つめ直し」、「現在の自分に必要なものを発見」したり、「自分の可能性を広げる(→自己理解・進路実現 やがては自己実現へ)」ことができるという予測のもと、この実践研究がスタートした。

度で 8 年目に入り、学校の特色の一つとして注目されている。

² 「ビジネス実践」での活動を発表する場として、11 月上旬に 1 日だけ開店する店舗の総称。当日は生徒等で企画・制作依頼した商品の販売、活動の発表、イベント、交流活動を実践する。今年度は、11 月 14 日に開店予定。

³ “A-Style”の A はアフリカ支援 (Assistance for Africa)、秋田 (Akita) からの情報発信、生徒の自発的行動 (Action) などを意味し、“A-Style”とは生徒自らの手で、「自分たちにできること」を秋田に居ながら実践し、自己理解につなげる形をあらわしている。

この実践研究は以下のような予測のもとに始められた。



これらのスパイラルサイクルが成立すれば、生徒が自分に必要な「何か」を発見すること、自分の可能性を広げていくことも可能になる。また、目標に向かい努力をし、実践し、到達できれば生徒の自己理解につながり、最終的には国際理解・国際協力活動を通じた自己実現が可能になっていく。

幸い、この概念と実践計画が、学校側に認められ、総合学習の時間「ビジネス実践」の組織の一部署として組み込まれることにより、実践が容易になった。

< 2 > 実践研究開始以降の取り組み体制と推移>

この実践研究の目的を以下の2点に絞り活動をスタートした。

- 1: 異文化理解
- 2: 自己理解・自己実現

① 校内の実践研究組織

実際に「総合的な学習の時間」を利用した「ビジネス実践」の中の1つの部署として実践研究を行ってきたのが、

- ・「地域貢献部 国際協力課（H19、20）」
（資料1、資料2 ビジネス実践組織図参照）
- ・「ユネスコスクール本部 ユネスコスクール（H21）」（資料3 ビジネス実践組織図参照）である。

部署の名称は変わってはいるが、活動のコンセプトや、活動の根本的なものは変わらずに現在にいたっている。

昨年度、地域貢献部国際協力課において、それまでの国際理解教育活動が評価され、国際教育交流馬場財団「第19回国際理解教育奨励賞『馬場賞』」を受賞した。

また、この『馬場賞』受賞が契機となり、本校が平成21年2月19日にユネスコスクールとして承認を得て、それ以後、活動の幅を広げることができるようになった。

本グループでは、独立行政法人国際協力機構東北支部（以下JICA東北と記す）と連携して、国際理解・国際協力の意義を生徒に考えさせ、生徒自らが「私たちにできること」を背伸びしないで実践する活動を進めてきている。

② 教員側からの働きかけと生徒の組織

教員からの働きかけは最小限にし、JICA東北から派遣される講師による「出前講座」を数回実施している。各回の出前講座は、その回の講座を受けての生徒の感想・疑問をもとに次回の内容を決める、といった生徒の理解や内面に重点を置いた内容を計画するように努めた。また、このグループの中で、さらに以下のような活動ベースの班分けがなされており、チームリーダーが中心となって活動している。

- (1) 校外班（外部団体との連携を中心に担う）
- (2) 校内班（「世界の笑顔のためにプログラム」など全校を巻き込んだ活動を担う）
- (3) 総括班（課全体の動きの把握、他の班との連絡・調整役、AKISHOPでの活動を中心に担う）

③ 校外の関係諸団体組織・地域との関係

学校内だけでは実現不可能な国際理解教育（世界

の現状をデータとして捉えることは重要だが、データだけにとらわれない、データの落とし穴にはまらないような教育活動）を実施するために、JICA東北と連携した活動を行っている。「国際理解教育＝英語科」という風潮は今も残っており、学校内で展開することに限界が感じられていたが、JICA東北と連携することで教科書（文字・データ）にはない内容を学習することが可能になった。H19年度からJICA東北連携授業を継続して行っている。また、秋田市内の小学校と連携し、JICA出前授業の補助や、生徒自らが教材を作成し、小学校に赴きテーマに沿った出前授業も現在数回ほど行っており、地元地方紙にも取り上げられた。

④各年度の実践研究実績（馬場賞受賞まで）

★平成19年度（地域貢献部国際協力課）

<JICA東北連携でのスタート初年度>

- ・5回の出前講座の実施

講師はJICA秋田デスク、青年海外協力隊秋田県OB、JICA東北支部長（甲斐直樹氏）など。

- ・JICA「世界の笑顔のために」プログラム⁴への参加

上記プログラムへの参加・協力の呼びかけを秋田商業全体に行なった。生徒による協力要請ポスター作成、全校朝礼・昼放送での呼びかけ、朝のクラスホームルームでの呼びかけ、各階への協力物品回収用ボックス設置を行った。

（秋田さきがけ新聞掲載 資料4）

この活動を通して、学校全体に国際協力課の活動の一部を知ってもらい、かつ「世界の笑顔のために」プログラムの認知度も高まったと考える。平成19年度の協力物品は第1回、第2回を合わせると、62点となり、生徒の関心・協力意識の高さが伺えた。

- ・AA（秋田・アフリカ）プロジェクト⁵への協力
マラウイ共和国の教育現場で不足しているサッカーボール・バレーボール等を送るというプ

ロジェクトに参加した。ボールを始めユニフォーム・ビブス・シューズなどを各部活動に依頼し410点もの用具を募集することができた。これにより生徒は後日感謝の手紙と映像をマラウイの高校生より送られた。



苦労が達成感へと変わったAAプロジェクト

- ・「アフリカ勉強会」⁶への参加

アフリカ理解に努めるとともに、30分程度のアフリカの教育事情についてプレゼンテーションを行った。生徒は自分たちの活動を学校外の人に向け発信し、多くの人に世界の現状を知ってもらえるように努力し、自分たちの考えや、解決策を多くの聴衆の前で発表した。同時に、多くの人と交流を図り、意見を交換することで視野を広げることができた。

★平成20年度（地域貢献部 国際協力課）

<JICA東北連携2年目>

- ・6回の出前講座の実施

この講座により、世界の現状をマスコミやデータというフィルターを通さずに直接学ぶ機会を得られた。



「協力とは何か？」貿易ゲームを通じて考える

⁴ 開発途上国で必要とされている教育、福祉、スポーツ、文化などの関連物品について、ご提供くださる方々を日本国内で募集し、JICAが派遣中のボランティアを通じ、世界各地へ届けるプログラム。（JICA HP より）

⁵ 青年海外協力隊秋田県OB会などの主催により、マラウイ共和国で理科教師として当時派遣されていた本県出身隊員へボール等のスポーツ用品を送付するプロジェクト。JICA秋田デスクより直接当課に依頼があり、学校内での呼びかけ参加に至った。

⁶ AA（秋田・アフリカ）プロジェクトの関連企画で、一般市民も含めたアフリカ理解をテーマとする勉強会。

- ・港北小学校での JICA 講師による出前講座の補助
「世界がもし 100 人の村だったら in 港北小 4 年生」
(秋田さきがけ新聞掲載 資料 5)



戸惑いながらも、小学生に対して初めての授業

- ・生徒の自身の手による単独出前授業の実施
世界の食糧事情と秋田県の食糧事情について、ポッキーという身近なスナックを使用し、児童に世界の食糧事情や格差を疑似体験させるよう試みた。



児童に対する説明に難しさを感じた

- ・ラジオ出演（伝える・広げる活動）
活動内容を月に一度、地元 FM ラジオ局の生放送 30 分番組で AKISHOP の告知をしたり、自分たちの考えていることを話した。



少々緊張気味の生徒たち

- ・「高校生のための国際協力入門」出版

これまでの取り組みを生徒・教員らがまとめたもので、多くの人にこの課の実践活動を知ってもらい、世界の現状についてより理解を深めてもらおうという考えのもと出版した。



- ・「アフリカ難民について」プレゼンテーション
試行錯誤を繰り返しながら改善・解決への方策を考えだした。

この年度は、校内の活動から校外へ発信する活動が増え、学校外の人にも我が校の取り組みを知ってもらう機会が生まれた。また、これらの発信により、より多くの人に国際理解・国際協力について身近に感じてもらうことができた。

Ⅲ グローバル教育の取り組み（２）

< 1 > 広がりを見せた実践例（馬場賞受賞以後）

平成 20 年度の『馬場賞』受賞を契機に、ユネスコスクールとして活動の幅を広げるべく承認申請を行い、平成 21 年 2 月 19 日にユネスコスクールとして承認を得て、平成 21 年度から校内組織において、地域貢献部国際協力課は「ユネスコスクール本部・ユネスコスクール班」と名称を変え活動を始めている。「本部」として格上げされることにより、規模の大きな活動が可能になった。過日 9 月 29 日には外務省講演会、高校講座を開催する運びとなり、全校生徒と共に地球規模の課題と国連の役割等を拝聴する場の設定までこぎ着けることができた。諸事情により、開催は中止となってしまったが、機会を作るに至ったことは意義深いことだったと感じている。

本グループはユネスコスクールとしての活動を主に担って行くことになるが、ユネスコスクールになることで以下のような広がりが生まれてきた。

- 1 世界のユネスコスクールの活動情報の提供
- 2 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加
国際交流の機会の増大 韓国・中国等海外との教員交流
- 3 世界の教育事情、国連機関の活動の把握
- 4 ESD のための教材・情報の提供
- 5 HP を通した情報交換
- 6 ワークショップ、研修会への参加
- 7 国内の連携強化
- 8 国内の関係機関との連携教科

実際に、ユネスコスクールに加盟することで、これまでは難しかった他校との交流や、勉強会などの情報が得られ、参加も容易になった。

そこでユネスコスクールとして活動を始めてから、さらに広がりを見せた実践例を次に紹介したい。

①AA（秋田・アフリカ）フェスタでの一般、大学生向けのプレゼンテーション



一般聴衆に質問する生徒

「1杯のコーヒーから見えてくるもの」と題し、フェアトレードとは何か、フェアトレードの果たす役割という視点から説明するとともに、コーヒー1杯の価格の中身（原価率）を検証し、社会・企業はこれからどうあるべきかを聴衆と一緒に考えた。

このプレゼンから「広がりを見せた」点は以下である。

(1) 一方的な説明ではなく、聴衆（消費者）の本音を引き出すような工夫（同じフロアでマイクを向け気軽に話してもらえ雰囲気を作るなど）をした。

(2) こちらの予測しない聴衆の反応でも、出方を変えたり、臨機応変に対応できた。異年齢（年上）の人に対しても礼を失せずかつ臆せずに話すことができた。

(3) 上級生が今後ユネスコスクール班を支えるであろう下級生を意図的に巻き込み、時には意見対立をしながらもプレゼンの内容を一緒に考えたり、手本を示したりと、下級生を育てようという責任感が芽生えた。

②ユネスコスクール班の生徒数名による、班の生徒対象にした授業実践

港北小学校出前授業を前に、事前に校内で高校生を対象とした授業をして、授業実践の感覚を養おうという意見が生徒から出て、中心的な存在の生徒数名による、班内の生徒対象の授業が行われた。

授業の内容は「世界を体感しよう」をテーマに、「男女比」、「高齢者、若年者の割合」、「世界の富はだれが持っている？」など役割カードを使って行われた。

このプレゼンから「広がりを見せた」点は以下である。

(1) 生徒自らが教材を選択し、時間配分を決め作業分担を行ったこと。

(2) 授業を実践した生徒の中には以前人前で話すことを得意としなかった生徒がいたが、授業実践を通し自分の持っている知識を相手に伝えることに喜びを見出し始めた。

(3) 授業を受ける側の生徒は授業実践した生徒たちを尊敬し、労うとともに自分も出来るかも知れない、次はぜひ自分もやってみたいと意欲的になった。

③港北小学校での今年度第1回出前授業実施(7/16)

小中学校向けに日本ユネスコ協会連盟が作製した環境教材「守ろう地球のたからもの」の中から、小学校の教員、高校の教員、授業を行なう高校生が相談しながら、小学生の学習内容、進度、時期的に適切と考えられる教材を選択し、それをアレンジして出前授業を計画し、実施した。

この出前授業は「私たちの食べているものはどこからきているの？」をテーマに、小学五年生（百十名）を対象にした授業となった。



異年齢の児童への指導に工夫が見られた出前授業

この授業から「広がりを見せた」点は以下である。

- (1) 教材をそのまま使うのではなく、生徒が教材について様々な角度から調べ、分かり易く説明するにはどんな方法が効果的か、などを検討して授業計画を作った。
- (2) 当日はフラッシュカードや黒板を用い、児童らが退屈しないように教室を移動させたり、漢字や簡単な計算問題を盛り込んだりと生徒ならではの工夫が随所に見られた。
- (3) この授業を受け、児童らは「自分達が食べているものはたくさんの飼料を必要としていて驚いた。」「私たちは他の生き物の命を食べている。」「飼料が安全でなければ、私たちは安全なものを食べられないと思う。」などの感想を寄せ、この授業が児童にとって自分の「食」や「地球環境」を考えるきっかけとなった。（夏休みの自由研究で取り上げた児童が現れたことも嬉しい成果となった。）

④港北小学校での第2回出前授業実施予定(11月)

第2回目の出前授業は生徒自らが選んだ「k j 法」を使ったワークショップ形式で行なう予定にしている。

小学生には「国連」についての知識や理解が足りないと予測し、当該小学校の教員に事前アンケートを取り小学生の現状を確認した上で授業の進め方を変えていった。「ミレニアム開発目標」を小学生にもわかりやすく言葉を換えて紹介した後で、小グループに分けて「私たちにはどんなことが出来るだろう」を付箋に書き出させようと計画している。今回は授業内容を考え、一斉に行なわずクラス単位で3展開授業を行なう予定で、より小学生個々の考えを引き出せる機会ではないかと期待している。

この授業から「広がりを見せそうな」点は以下である。

- (1) ユネスコスクールとしての活動や、現在の学習内容を小学生に伝えようと出前授業の教材選定を行なったこと。
- (2) 当日は難しい言葉を分かりやすく言い換える工夫や、児童らが退屈しないような工夫、グループ活動を盛り込んだこと。
- (3) 出前授業本番に臨む前に、ユネスコスクール班の生徒38名を対象に数回「k j 法」を使い、「秋田を元気にするには」や「国連と聞いて想像するもの」などのテーマで数回ワークショップを実施し、シミュレーションを繰り返し検討を重ねたこと。

この授業は11月に行う予定であり小学生も高校生による出前授業を楽しみにしている。

出前授業を実施後は小学生、教員に対してアンケートを行い今後の活動の参考にしていきたいと考えている。

生徒たちは日々の生活の中で感じたことを素直に言葉に表し、それらを背伸びしないでのびのびと活動に移していく様子が見受けられ、現在進行形でその成長が続いているところは、まさに「広がりを見せている」点そのものである。

生徒自身もそれまでの「知識を得る」「行動を起こす」ところからさらに発展して「たくさんの人に伝え行動を起こさせる」新たなステージへと歩みを進めている。「私たちにできること」を背伸びせず実

践していき、さらに次世代をにう児童らも巻き込んだ活動を展開していったなら、まさにこの活動は「ユネスコスクール」としての目的にかなったものになるはずである。

< 2 > 生徒が得た能力

これまでグループの活動を中心に記載してきたが、これらによって生徒が得た能力をここで列挙したい。

1 : 知識

- ・元青年海外協力隊員の出前講座などを通して世界の現状を知ることができた。
- ・国際協力に関係したイベントや勉強会などに参加し学校の中だけでは得られない生の声、生の体験を目の当たりにした。

2 : コミュニケーション能力

- ・諸問題に対し、自分たちの考えを素直に飾らずに述べ、それに対する解決策を様々な手段（人・文献・インターネットなど）を用い、まとめることで、情報を活用することができるようになった。
- ・自らが計画した勉強会を開催したり、小学校での出前授業を行うなどして、児童らに世界の現状を話すことを通して、異年齢の相手に対する言葉の使い方、配慮、思いやりのところが自然に生まれた。また、自分たちの計画したことがうまくいかず、壁に当たった時、もう一度これまでの軌跡を振り返り、どうすればうまくいくのか、理解してもらえるのかを考えようとする気持ちが起った。
- ・積極的に地域の人と考えを共有する機会を持ち、色々な立場の人と意思疎通を図ることができるようになった。

3 : 探求心

- ・出前講座を通して、自分が知らなかった現状を知り、驚くとともに、「より深く知ろう」「自分には何ができるのか」という心が芽生えてきた。

4 : 自己理解

- ・様々な取り組みや、自分の行動を振り返り、見つめ直すことを通して自分自身の能力に気づくとともに自己理解へ結びつく。結果的には将来や職業について考えることへ繋がる。

< 3 > 生徒の評価方法と成果

生徒はこれまでの活動を通して、「自分について考える＝足元を見つめなおす」所に到達しつつある。世界の現状を知り、世界の中の日本を知ること、自分の置かれている状況を見つめなおす。そこからさらに自分の生活や将来に結びつける流れが生まれてきた。具体的には、活動を通して自分のやりたいことを発見し、大学でさらに深く学ぼうと希望する生徒が現れたり、自分の得意な面に気づき、就職する際の職種に結びつける生徒が現れる事例が挙げられる。この実践において、様々な活動を通して生徒は自分自身を見つめ直し、自分に何が足りないのか、何を探しているのか、自分とは何であるかを発見することが可能になった。同じ時間、同じ講座、同じ活動を共有してはいるが、誰一人として同じ方向に進むわけではない。この活動を通した生徒の成長は個人個人で違うので、相対的な評価はできない。しかし生徒らは異文化理解を深め、さらにこれらの異文化理解・国際協力活動によって自分自身、自分をとりまく地域社会、取り巻く環境についてより深く理解できるようになってきている。

この活動の強みの1つは生徒が自らの弱いところや強みを発見し、それらを進路に結びつけることができることだと考える。活動を通した生徒の成長は個々で違うが、自らを取り巻く環境の中で問題点や課題を発見し、それらを自らの力で解決できるようになってきている。

しかし、財政面での制約が現在の課題である。学校からの予算以外は基本的には収入がないため、アフリカやアジアといった海外に出かけることは困難であるが、今後はそのような課題をクリアすべく、外部からの援助や便宜供与を積極的に得たいと考えている。

< 4 > 今後の予定とめざす生徒像

・書籍出版

「高校生のための国際連合入門」出版予定

ユネスコスクールとしての今年度の活動や生徒の実践研究などを生徒・教員らがまとめたもので、昨年度の「高校生のための国際協力入門」の続編となる。

・アフリカスタディーツアー

財政面で厳しい中であるが、実際に「目」でみることの重要性を教員・生徒とも実感しているところである。そこで今年度はJICA 東北、JICA ウガンダ事務所、秋田県国際交流協会の協力を得て、ユネスコスクール班の教員・生徒 10 名前後による「アフリカスタディーツアー」を計画中である。実際にはウガンダ共和国を訪問地として考えているが、現地では学生同士の交流授業を行ったり、こちらの生徒が授業をするという活動も考えている。現地の雰囲気や空気を肌で感じ、そこから新しい活動や目標を見いだすことにも繋がる可能性が大いにあると考え、期待しているところである。

できることなら永久的な交流ができる支援や教育援助を取り付けたいと考えている。それが可能になれば、学校、地域を巻き込んだ持続可能な活動の幅に広がりが見られると考える。

世界的な視野を持ちながらも、自分の足元（地域）で活動させることを引き続きさせたいと考えている。生徒は世界の現状を学び、地域社会で何ができるかを考える“グローカリズム(Glocalism)”の視野に立ち活動させていきたい。実際に生徒達は、すでに世界の現状を学びながらも地元秋田の現状を見つめ、「秋田の食料自給率をより高めるには?」、「秋田の自殺率の現状をどうやって打破できるか?」、「秋田をもっと活性化させるには?」など真剣に考え始めている。

今後は我々の活動を地元の小学校・中学校や地域社会に向けて発信することが大切になり、そのような活動を通して、生徒はさらに自分自身を見つめ直し、自分らに何が足りないのか、何を探しているのか、自分とは何であるかを発見することが可能になっていくだろう。

IV グローバル教育との関わり

<1> グローバル教育の果たした役割

生徒の成長・自己理解を最終目的に据え、その手段として国際協力活動・国際理解教育を実践してきたが、活動年数を重ねていくうちにその活動の波及効果が明らかになった。

<波及効果の推移>

第1段階 学校の学習活動の一組織で実践

活動は部署に所属する生徒中心だった。

第2段階 活動は学校を巻き込み、学校全体へ広がる

生徒会がエコキャップ運動を開始した。

全校をあげた「世界の笑顔のために」プログラムへの積極的協力が見られた。

第3段階 活動は他校（校種を超えて）、地域へ

出前授業や、地域の外部団体からの依頼で発表する。他教員の目が外に向かい出す。

地域住民からの問い合わせ、発表依頼、地域広報誌からの取材など、地域への刺激、影響が見られてきた。



「世界の笑顔のためにプログラム」への協力お礼と

相手国から届いた礼状を紹介

(秋田さきがけ新聞掲載 資料7)

これまでの本グループの活動は本校におけるグローバル教育の実践そのものであり、その実践の結果、学校内のみならず、学校外、地域社会への広がりを見せている。また、生徒自身も広がりと同時に少しずつ成長していき「自分とは何か」「自分には何が求められているのか」など、自己理解に結びつくような考え方が出来るようになってきている。

<2> 「総合的な学習の時間」の考え方と

本校のグローバル教育

平成22年度から実施される高等学校学習指導要領の「総合的な学習の時間」については、その狙いを「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、

自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」と示してある。思考力や判断力、表現力などが求められている「知識基盤社会」の時代においてはこれらの資質や能力がますます重要な役割を果たす。

まさにこの実践活動は生徒自らが自分から課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質を育てたり、学び方やものの考え方を身につけたり、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てる活動ではないかと考える。そして、それらの態度を育て、最終的には「自己の在り方生き方」を考えることができるようにすることを目指している点においても新指導要領の掲げる目標に合致していると言え、今後も進化、発展させていくに値するものであると考える。

・添付資料

資料８：JICA's World 1月号掲載

資料９：年間指導計画（H21年度）

港北小学校出前授業 学習指導案

指導教員 加賀谷 由紀子

指導生徒 ユネスコスクール班生徒 9

名

1 授業日時 平成21年7月16日(木) 5、6時間目

2 授業対象児童 秋田市立港北小学校 5年生 110名(3クラス一斉)

3 本授業の目的 **食材のもとをたどることで、普段の食生活では見えにくい物事の関係性を読み取る。**

＜高校生＞「守ろう地球のたからもの」(日本ユネスコ協会連盟制作)を用い、自分たちが得た知識を小学生に伝え、広げることを通し、自らの知識や能力を再確認する。

＜小学生＞食肉を生産するにはエサとして多くの穀物が必要であることや、多くの食肉や魚などの食材をたどると植物にたどりつくことを理解する。さらには、自らの「食」や自分たちを取り巻く「環境」について興味、関心を持ち、自分たちがどうしていかなければいけないかを考え行動するきっかけとさせる。

4 授業までの経緯 昨年度より、対象学年の児童とは交流があり、JICA 秋田デスクの出前講座の補助に始まり、JICA「世界の笑顔のために」プログラムへの協力要請、高校生による単独出前授業の実施も数回行ってきている。幸いにも小学校教員、当該小学校長の理解・協力があり、このような交流が定期的に実行できている。児童は担当する小学校教員らの指導もあり国際協力や地球規模の問題などに意識が高く積極的な意見も見られ、高校生にとっても「教える」だけではなくそこから「超えなくてはいけない壁」や「次なる課題」を発見できるよい機会となっている。

今回はユネスコスクール加盟により手にすることができた、日本ユネスコ協会連盟制作の小・中学校向け環境教材「守ろう地球のたからもの」を用い、小学生に「食」や「環境」等について考えてもらいたいと高校生自らが授業の題材も設定して授業に向けて準備を進めた。

5 留意点

- ・教材をそのまま使うのではなく、生徒が教材について様々な角度から調べ、分かり易く説明するにはどんな方法が効果的かなどを検討して授業計画を作る。
- ・当日はフラッシュカードや黒板を用い、児童らが退屈しないように教室内を移動させたり、漢字や簡単な計算問題を盛り込んだりする工夫を入れる。
- ・高校生がこの授業計画を練るにあたり、まず自分たちでしっかり教材を理解

し、消化してから計画を進めること。

6 授業の流れ

「私達の食べているものはどこから来ているの？」

	高校生のはたらきかけ	小学生	高校教員のはたらきかけ
導入	・質問「今日の給食はなんだった？」給食の内容を思い出させ、「牛肉」「豚肉」「鶏肉」「魚」に分類させる。 ・質問「では今晚何食べた～い？」「牛肉」「豚肉」「鶏肉」「魚」に分かれ移動させる。	給食の内容を思い出し発表する。 給食のメインは何だったか考える。 食べたいものを決め、それは「牛肉」「豚肉」「鶏肉」「魚」なのか考え、指示された場所に移動する。	・小学生の間に入り、声を拾う。 ・高校生の発話が教室後方まで聞こえるか確認する。 ＜小学生を初めに引き付ける導入の仕方を指導＞
展開	・本授業の目的を分かりやすい言葉で伝える。 ・それぞれが大きくなるまでにどのくらいの飼料(えさ)が用いられているかを考えさせる。 ・板書したり、イラストを描いたりして小学生に量を分かりやすく教える。 ・自分たちの食べる食材は何をエネルギーとして育てているのか考えさせる。	・小学5年生の平均体重 40kg として、何人分(何分の1人分)のえさが用いられているか考え挙手をして答える。 ・それぞれがどの程度のえさを食べて大きくなっているのかを知る。 ・食肉となる動物を育てるには大量の穀物が必要であることを知る。 ・食材をたどっていくとすべてが植物にたどり着くことを確認する。	・小学生の直感や感性を邪魔しないように助言しながら解答を出すところまで導いてやる。 ・板書に間違い(数値・漢字)ないか気を配る。 ＜計算・漢字も取り混ぜた簡単なクイズの出題、イラスト・カードを用い視覚で理解させるよう指導＞
まとめ	私達の食は植物なしではあり得ないことや、肉を食べることは大量の植物を消費することにつながることを説明する。(私達の「食」はたくさんの「命」によって成り立って 植物は日光・水・空気・土の栄養分をエネルギーとして育てることから、地球の恵みに感謝し食べ物を大切にしてほしいことを伝 (「ありがとう」は漢字で書くと?＝「有難う」になり、あることが難しいという意味である事を伝える。残さず食べる、地元のものを食べることの意義や、地球環境の破	・食物が育つ要素を思い出し発表する。 ・「ありがとう」を漢字で書くとどうなるか分かる児童が挙手、板書する。	説明だけにならないように、イラストやフラッシュカードを高校生が使うよう指導する。 小学生の目が高校生に向いているか。 ・問題提起をした時に小学生はきちんと耳を傾けているか。

これから私達が出来ることが何だろうか? <問題提起>

	壊で「飼料」の安全性にも疑問が残される点も加える。) ・今日の授業の感想を聞く。 ・アンケート用紙を配り、小学生の中に入って様子を見守る。 ・次回出前授業の予告	・自分の「食」は今までどうだったか振り返る。 ・気づいたこと、感じたことを発表する。 ・アンケート用紙に思い思い感想を書く。	＜小学生に問題意識を持たせ、何かしようという気にさせる指導の工夫＞
--	---	--	--

＜ ＞は教員が準備段階で高校生を指導する際に留意した点